

1 工程@1円～知的障害者の労働現場

25: クルマ社会と福祉政策

千葉 晃央

「ガリガリガリ…」

私は急いでいた。納期ギリギリでの商品の出荷を任されたからである。今回出荷するのはお菓子を入れる箱。納品に使う車はトヨタ・ハイエース。その荷台いっぱい積みこんで出発をした。その箱は利用者さんがみんなで作った「製品」。今日の朝、この箱の納品先である同じグループの施設から「14時までには必ず欲しいねん！」と確認の電話が入ってきた。自分の職場からその施設までかかる時間は40分程度。13時、いわゆる「昼一（ヒルイチ）」で出発したので間に合う予定である。しかし、今日は金曜日。若干道が混んでいる。

仕事を始めて4ヵ月。先輩から教えてもらった渋滞が少ない道をチョイスした。先輩には仕事で運転する時は、いつも以上に速度に注意するよう言われたこともよく覚えている。スピードメーターを確認しながらアクセルを踏む。それにしても、このクルマは運転がしにくい…。先輩が同乗して、出荷の方法を教えてもらったときの施設のクルマとは勝手が異なる。今日乗っているのはコラムシフトのミッション車。コラムシフトのクルマは就職して初めて運転を経

験した。ミッション車に関しては、それまでも運転をしてきたので、たくさん不安があるわけではなかった。しかしコラムシフトの車は、シフトがどこに入っているかわかりにくい。そして車ごとにシフト（ギア？）の入り具合に癖があるように思う。それでも普通に出荷する分には不安はなかったので「大丈夫です！」と行って職場を出てきた。

グループ施設につくと、こういわれた…。「千葉君！ごめん！このままの業者に一緒に行ってくれへん？荷降ろしをして、積み替えをしている時間がないねん！さっき業者さんから電話があつて、どうしても14時30分に欲しいといわれてん…頼むわ～！」この仕事はグループ施設から頂いた仕事だった。そのグループ施設は業者さんから頂いた仕事だった。その業者さんから、さらにタイトな要望を言われたらしい。…私は事情がよく分からず（迷惑をかけてはいけない）と思い、「ハイ、わかりました…」というしかなかった…。相手は私たち施設に仕事をくれた立場の人（グループ施設の職員）であり、この次以降の私たちの仕事がなくなっては困るし、同じグループの先輩でもある…。そして、なんととっても依頼

元の業者さんに迷惑がかかるといけない…と考えた。…とはいったものの、出荷先がどこにあるか?については知らなかった。そして、ここは「京都」である。秋田生まれ、大阪で育った私には京都の地理はわからないところが当時はまだ多かった。

「千葉君、ついてきて!」とグループ施設の職員が言って、その施設の車に乗り込んだ。その車も出荷する箱が荷台に山積みである。…行くしかない。先に施設を出たグループ施設のクルマは構内を前に進んでいった。門を出た車は私が知っている道とは逆方向にむかった!「え、そっちからいくの????????」私が知っている方ではない方の門を出た道を進んだのである。…焦った。まわりは入り組んだ住宅地。道も広くはない。とにかくこちらは前の車についていかななくてはならない!…そう思

ったが、道には勾配があり、ミッションをゴソゴソと変速しているうちに距離が空いてしまった。もうすでに前の車は一つ目の十字路を抜けて右折し、右折後すぐにある橋を渡って行ってしまったのが見えた。また焦った。とにかく行こう!でも混んでいるやん。同じように十字路で右折をしたいのに、交差する道路が渋滞をしている!渋滞の列の車と車の間をすり抜けながら、右折をしなくてはならない。しかもミッション。ほんでコラムシフト。でも置いていかれては、どこに行くかすらわからない。さらに業者さんに迷惑がかかるし、グループ施設にも当然迷惑をかけてしまう。行くしかない…。

自家用車とは違い、ハイエースは車長があり、内輪差がでやすい…。気をつけなくては…と判ってはいるが私は今、ついてい



くべき、前のクルマに置いていかれている…。やっぱりいくしかない…。その時、嫌な音が聞こえた。乗っていたハイエースの右の腹を渋滞している車の右前部に当ててしまったのである…。

仕事を始めて数カ月の私には判断できないことが多かった。今なら、「無理です」という。あくまで自分の施設からグループ施設までの出荷の作業は、私たちの施設側でやることになっていたのです、その業務はするけれども、その先に関してはグループ施設と業者さんとの間で決められるべきことである。だから、今なら当然「無理です！」という。しかし、仕事を初めて数カ月の私にはこの判断ができなかった。

車道と廊下は違う！

神戸三ノ宮歩道暴走事故、山陽道渋滞車列にブレーキなしでの追突事故、滝畑ダムでの車の事故…交通事故のニュースは毎日なくなることはない。昭和30~40年代、「モータリゼーション」「交通戦争」といわれ、年間の交通事故による死者数1万6000人を超えた。ここ数年は年間約4000人台では推移している。ちなみに児童虐待の年間死者数は二桁（うん十何人）とも言われている。ニュースでは高齢ドライバーによる暴走、逆走のニュースも当たり前になってきた。

車を動かす以上事故のリスクは逃れられない。「あの職員は運転が得意だから…」、「あの利用者さんは運搬が得意だから…」、「あの利用者さんは挨拶が得意だから…」と同じ人ばかりが車に乗ることも偏った人

だけにリスクが増えてしまうことも忘れてはいけないと思う。

福祉の業界では、公が数年後のヴィジョンを事前に示し、そこに向かって制度を整えていくことがよくある。その流れのなかで「脱施設」の意味も含めて行われたのが、福祉利用者の地域生活への移行である。そのヴィジョンで使われるのが次のイメージである。それまで、「施設の中で」利用者が暮らす居室に、何かの時はすぐに介護や医療のチームがすぐ対応できるようにしてきた。それを施設規模ではなく、地域規模で実現するというイメージであるという。つまり施設内の利用者さんの居室は地域の利用者さんの住宅に置き換え、そして施設の廊下は地域の道路と置き換えて考えるというのである。そこでは「シームレス・ケア」という言葉も用いられていて急性期から地域生活までの切れ目のないケアを地域全体で実現することが大切であるといわれた。そのためには、地域内の医療機関、介護の施設がともに連携をするシステムを構築し、実現していくということが求められたのである。施設に入居しているときは、どんな状態であっても、どんな時間であっても基本的には介護、医療を届けることができた。これを地域のレベルで実現するために現在、医療、介護、福祉などが訪問型等のサービスで取り組んでいる。

クルマ社会集金システムの中の福祉

…以上のようなすべての話は大前提に「クルマ社会」がある。つまり移動手段としての車を前提にしている。施設内なら医



療・介護チームが徒歩で廊下を歩いていくが、地域では「車」による移動となる。ヴィジョンをきいているだけなら、とても簡単に聞こえる。しかし、使うのは「車」。そこには交通事故のリスク、車のメンテナンスの手間とコスト、課税、そして車両があることによる駐車場スペースの必要性などが付随する。車を買ひ、保険代を払い、税金を払う。車は日本の基幹産業といわれ、そして車が走るには道路建設のための工事が必要になる…。つまり、これら全てが前提と言える。クルマメーカーも、国も、広告等を駆使し、車を持たないことへの不安を国民に植え付け、購買意欲を掻き立てる。企業は自動ブレーキ等による安全性能、環境負荷の軽減、さらにかっこいい、かわいいと感じる車をつくる。先日は運転が終わると「おつかれさま！」と話す車に「本当

に癒される！」と言っている方にも出会った。

若者のクルマ離れというけれども、こういう社会のカラクリに気づきはじめてのではないかとも思う。つまり、クルマが国にとって、重要なお金を集めるしくみになっている！ということ。それが若者のクルマ離れではないのかと。

京都でも車の暴走事故があった。亀岡でも、祇園でも。その後に対策としてなされたことは、私のまわりでは学校の近くの道路に歩行者と車を分ける線が色つきで塗り直されたこと、そして軟質プラスチック製のポールがその一部に建てられたということだけ。根本的な解決には程遠い現実と感じる。

「クルマ社会」を批判する本も絶版が目立つ。そう、今はもう「クルマ社会」を批

判する人たちすら、絶滅の危機。大気汚染、騒音、排ガス等による健康被害も「エコ減税」などのキャッチフレーズのもと、すっかり払拭された感もある。ドラえもんに出てくるような子どもたちが遊ぶ空き地は全て駐車場になったという指摘もされて久しい。多くの人が一定の生活を享受できる社会を大切にするのが「福祉」ならば「公共交通機関」の意味は再度考える機会があってもいいのではないか？

朝の住宅街には、幼稚園バス、高齢者のデイサービスの送迎車、障害児・者の施設送迎車が連なる。支援学校の終わる時間には放課後等デイサービスの送迎車が連なる。再度、得ているものと、失っているものを知っておく必要があるように感じる。

事故当時、グループ施設の先輩も仕事を始めて3年目ぐらいだった。事故は仕事を頂いている業者さんの要望に応えようという思いの結果だった。悪気は全くない。業者さんの要望に応えなければ次の仕事が危ういかもしれないというギリギリの関係の中、お仕事を頂いているという厳しさがある。先輩を恨んでいたりはない。問題なのはこういう福祉の状況、障害者がおかれている状況である。

BACK ISSUES

施設が求める「障害者像」はあるのか？24 2016年3月

連絡帳 23 2015年12月

におい 22 2015年9月

作業着 21 2015年6月

食べる 20 2015年3月

通勤 19 2014年12月

クスリの作用、人の作用 18 2014年9月

倫理観でかたづけられる暴力 17 2014年6月

触れる 16 2014年3月

対談企画 「教育と福祉の連携を模索する」 2014年3月

情報の格差 15 2013年12月

20年前のノートから 14 2013年9月

そうじのねらい 13 2013年6月

個別化の暗部 12 2013年3月

グループワークの視点 11 2012年12月

実習生がやってきた！ 10 2012年9月

月曜日のせいやな 9 2012年6月

所得を決める福祉職？8 2012年3月

世界とつながる社会福祉現場 7 2011年12月

この現場へのたどり着き方 6 2011年9月

障害を持つ友達と過ごすとは？巻末座談会

2011年9月

旅行がない！ 5 2011年6月

職員の脳内回路 4 2011年3月

たかがガムテープ、されどガムテープ 3

2010年12月

利用者が仕事上の戦友 2 2010年9月

障害者自立支援法で不景気に！？ 1 2010年6月